

ウランバートルにおけるゲル地区の生成過程とその 存立基盤

-問題地区から住まい空間への認識論的転換-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松宮, 邑子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20926

2020年1月17日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員（主査） 文学部専任教授

氏名 川 口 太 郎 ㊞

（副査） 経営学部専任教授

氏名 中 澤 高 志 ㊞

（副査） 横浜市立大学国際教養学部教授

氏名 小 野 寺 淳 ㊞

1. 論文提出者 松宮 邑子

2. 論文題名

（邦文題） ウランバートルにおけるゲル地区の生成過程とその存立基盤
— 問題地区から住まい空間への認識論的転換 —

（欧文訳） Generation and foundation of *Ger* Area in Ulaanbaatar
: An epistemological turn from problematized area to lived space

3. 論文の構成

第1章 はじめに

1-1 本研究の視座

1-2 ゲル地区の位置づけ

1-3 本研究の課題

第2章 ウランバートルとゲル地区

2-1 モンゴルの近代化と社会主義国としてのあゆみ

2-2 体制移行後のモンゴル

2-3 現在のゲル地区

2-4 小括

第3章 ゲル地区の形成と居住者のウランバートルへの移住・移動・定着

3-1 ゲル地区の形成と拡大

- 3-2 居住地移動とハシヤーの獲得
- 3-3 住まい空間の充実
- 3-4 小括
- 第4章 居住者の就労と生活戦略
 - 4-1 ウランバートルの労働市場
 - 4-2 居住者の移動歴と職歴
 - 4-3 世帯の就労と家計の維持
 - 4-4 個人・世帯に経歴にみる今後の生活
 - 4-5 小括
- 第5章 ゲル地区再開発事業にみる居住空間と住まい空間
 - 5-1 ゲル地区再開発事業とは
 - 5-2 再開発事業に直面する人々
 - 5-3 小括
- 第6章 住まい空間としてのゲル地区
 - 6-1 本研究の知見
 - 6-2 ゲル地区の存立
 - 6-3 ゲル地区の今後の有り様

4. 論文の概要

社会主義国として近代化を遂げてきたモンゴルでは、市場経済への移行が始まる1990年以降、首都ウランバートルへの人口と機能の集中が急速に進み、今では国内人口の約半分を有するに至っている。その結果、都心部には近代的な建築物が林立する一方、周辺の丘陵地にはインフラが未整備のまま低層の住宅がスプロール的に広がり、一種のスラム的「奇観」として、また社会的剥奪が顕著な「問題地区」として知られている。その特異性から、内外の研究機関や援助機関は重ねて実態調査を行い、さまざまな処方箋を出すものの、改善への道のは遅々として進んでいない。本論文はゲル地区と称する当該地区の住民から丹念にライフヒストリーを聴取し、生活の長期にわたる実践の蓄積として現在の生活を描き出し、また社会の変動を個人の主体的な生活戦略と絡めることで、無秩序に広がる住宅地・ゲル地区の形成過程及び存立基盤を明らかにした。

本論文は全6章からなり、第1章で問題意識や研究の目的・視点を示した後、第2章ではゲル地区の拡大をウランバートルの都市発達史と結びつけて論じ、第3章では、住民の生活履歴を踏まえてゲル地区の形成及び変質の過程を明らかにする。第4章では、住民の日常生活の実態からゲル地区における住まい空間が維持・継承されるメカニズムを明らかにし、第5章では、ゲル地区の更新を目論む再開発事業の進捗が芳しくない現状を指摘する。そして第6章では、以上の議論を整理したのち、ウランバートルにおいてゲル地区が存立してきた背景をモンゴルの地域的特性を踏まえて考察するとともに、住まい空間としてのゲル地区の今後の可能性について検討する。

第1章では、発展途上国の不良住宅地やウランバートルのゲル地区に関する研究を展望し、ゲ

ル地区が途上国における「スラム」や「スクォッター」という既存概念に回収されることでその問題性が強調され、負のイメージに集約されてきたことを批判する。そして、そうしたステレオタイプ化されたゲル地区のイメージを相対化するために、ゲル地区を居住者の住まう実践によって構築されてきた“住まい空間”と捉える本研究の視点を提示する。

第2章では、社会主義時代から体制移行を経て今日に至るまでの社会経済的背景や制度的枠組みの変遷を概観し、ゲル地区が歴史的に形成されてきた過程を整理する。モンゴルでは体制移行後、地方での生活基盤の崩壊や居住地移動の自由化を背景にウランバートルへの転入が急増し、その受け皿となったゲル地区は爆発的な拡大を遂げた。しかしウランバートルでは、社会主義時代から一貫してアパート化による住宅整備が目指され、ゲル地区は解消されるべき存在としてインフラの整備は看過されてきた。問題があるとされるゲル地区の住環境はいかなるものであり、そこに暮らす人々はどのように日々の生活を営んでいるかが詳述される。

第3章では、空中写真の分析と住民へのインタビュー調査の結果をもとに、ゲル地区が形成され、拡大し、変容する過程が示される。ゲル地区は土地私有の開始とともに土地の占有が競い合うようにして進んで外延化するとともに、個々の敷地内では移動式のテント家屋と並行して固定式の木造家屋の増築が進み、住まい空間の充填が図られる。この過程を居住者の経験から読み解くことで、居住者のウランバートルへの移住、ウランバートル市内での移動と、自らの敷地を獲得し固定家屋を建てることで定着していく過程が明らかにされる。

第4章では、居住者の生活の履歴をたどりながら、ゲル地区における個々の住まい空間が多様であることが示される。従来、ゲル地区は低所得者による不安定居住の集積として画一的に捉えられてきたが、実際は、移住の目的や就労形態、将来展望が異なる人々が隣り合って暮らす多様な住民の寄り集まりである。外形的には似たような敷地が並んでいたとしても、住まい空間の内実はさまざまで、これまでの経歴や将来の生活設計の有り様によって大きく異なり、将来的には多様性が格差に転化する可能性も示唆する。

第5章では、ゲル地区再開発事業に焦点を当て、インフラの整備されたアパート地区への更新という個々の住民の主体的努力だけでは解決し得ない課題を検討した。ゲル地区の再開発は社会主義時代からの懸案であるが、進捗状況は思わしくないうえに実現への道筋も不明確である。そこには行政の事業計画や資金調達などの見通しの甘さや、先進国で成功した事業を無批判に移植する姿勢が問われるだけでなく、従来から実践されてきた住民による主体的な住まい空間の改善を阻害してさえいると批判する。

以上を踏まえ第6章では、本研究の知見を整理するとともに、ゲル地区を存立させてきた地理的・社会的背景や、それが示唆するゲル地区の今後を展望する。遊牧生活に由来する移動式テントでの居住や濃密な親族関係の存在、社会主義時代のアパート建設の遅滞と一時的居住地としてのゲル地区の既成事実化、寒冷地におけるインフラ整備の難しさ、そして体制移行後に急速に進んだ土地の私有地囲い込みなどが、ゲル地区を存立させ拡大させてきた前提条件であった。つまり、ゲル地区はウランバートルに半ばあるべくして存在し、こうした条件の下で住まう実践を發揮した結果が今日のゲル地区であるという。一方、こうした存立条件には変化の兆しもある。住

まい空間の商品化であり、親族関係の希薄化であり、格差の顕在化である。グローバル化や情報化の進展で人々の住まう実践や関係性が及ぶ範囲は広がっている。グローバルなスケールの下でゲル地区、ひいてはウランバートルという都市の存立を検討していくことが不可欠であると結ぶ。

5. 論文の特質

本論文の第1の特質は、これまで低緯度地方の事例に偏りがちであった途上国都市の不良住宅地研究に対し、高緯度地方を事例にとり相対化を試みた点である。温暖湿潤、農耕定住、植民地支配の経験を持つ低緯度地方の途上国に対し、対象としたモンゴルは寒冷乾燥地にあり、遊牧移動生活を伝統とし、過去に社会主義体制下にあった経験を持つ。これまでの多くの研究や報告で示される途上国の都市観は低緯度地方を念頭に置いた先進国のまなざしであり、そうした視線に基づく問題認識に対し異を唱え、住民の立場から住まうことの意味を問い直すとする問題意識は新鮮であり、途上国都市の不良住宅地研究に大きなインパクトを与えるものと思われる。同時に、その結果として、耐寒性に優れた移動式住居の存在や寒冷地仕様のインフラ整備の困難、遊牧生活で培われた親族の紐帯とその裏返しでもあるコミュニティの欠如、社会主義体制下で築かれた住居観や体制崩壊後に無秩序化したなかでの混乱など、対象地域の特質を浮かび上がらせることにも成功している。

第2の特質は、“住まう実践”という概念を案出し、それに基づいて人々の居住生活を過去に遡って描き出し、さらに将来の生活展望にも言及した点である。その概念自体は生硬な嫌いもあるが、それを居住生活をも含む人々の生活戦略と捉えると、従来の住宅地研究に対し、現時点の居住生活に関心を奪われ過去や未来の時間軸に対する意識が希薄な点、居住の側面だけに注目し生活の一部として住まいがあることへの理解が欠けがちな点、住宅地としての集合的表象に関心が集まり、そこに住む個人の営為の積み重ねが総体としての住宅地であることの認識が不足している点など、多くの点で根本的疑問を投げかける。先進国・途上国を問わず、住宅地の形成や変貌に関する研究、あるいは居住地移動の研究に対して大きな刺激を与えるものと期待される。

第3の特質は、言わずもがなのことでもあるが、延べ300日にも及ぶ現地調査で100人以上の人々にインタビューを行い、それも再訪を繰り返すことで本音を引き出したことである。こうした緻密な調査の過程で現地の事情や言語にも通じるようになり、得難い現地の資料をも分析の対象となし得た。まさに現地に寄り添ったフィールドワークの成果であり、フィールドワーカーとしての能力の高さを示すものである。さらに付け加えれば、本論文全6章のうち、実態調査を踏まえた4つの章は査読付き学会誌に単著で掲載済みであり、研究者としての実務遂行能力を遺憾無く発揮するものとして賞賛に値する。

6. 論文の評価

本論文は精力的な調査により、これまでの途上国の不良住宅地研究に新たな展開をもたらしたものと高く評価されるとともに、マクロな視点とミクロな視点を融合させた著者の視角は意欲的であり、今後の展開をおおいに期待させるものである。

ただし、以下のような課題も残る。第1に、“住まい空間”や“住まう実践”といったキー概念に生硬さや理論的詰めが甘さが残る点である。“住まう”という語には能動的であるとともに主観的な意味合いがあり、住まいへの愛着や思い入れといった要素も多分に含意するものと思われるが、現象学の議論やルフェーブルの空間論などの吟味が十分に尽くされていない点が惜しまれる。早急な結論を見出すことは容易ではないだろうが、今後の研究のなかで概念の完成度を高めることを期待したい。

第2に、緻密なインタビュー調査から心の襞を汲み取るような語りを聴取し、ゲル地区に住む人々が多様であることを描き出すことに成功しているものの、多様性の発見にとどまり、その先一步進んで類型化や一般化に言及するには至らなかった。多様性の発見自体、ゲル地区に対する認識を大きく変えるものであるが、人それぞれに個性があることを述べただけでは普遍的な議論への発展が期待できない。同様に、ゲル地区をもたらし蒙古特有の環境や社会経済的な状況を浮かび上がらせることには成功したものの、それは地域の特性を見出したに過ぎず、グローバルな比較研究を視野に入れた本質的特質を抽出するには至らなかった。事例研究を重ねるなかで、比較地誌研究の理論的枠組みを構築していくことを期待したい。

以上のように、本論文に課題を指摘することは容易であるが、それは今後さらなる研究によって解消され得ると期待するものであり、本論文の評価をいささかも減じるものではない。

7. 論文の判定

本学位請求論文は、文学研究科において必要な研究指導を受けたうえで提出されたものであり、本学学位規定の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（地理学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上